

我郷土のブラキストーン線

和田千藏

内 容

ブラキストン線の意義及び由來……………	一三三
ブラキストン線に関する諸學者の説……………	一三四
ブラキストン線に對する予の意見……………	一三五
青森縣に於ける動植物分布状況の特徴……………	一七四
摘 要……………	一七六
參照文獻……………	一七八

我郷土にはブラキストン線と稱呼せらるゝ動物分布境界線存在し、日本動物分布状況に顯著なる特徴を發揮せしめ居るに拘らず、郷土人士にしてこれを認識せざるものあり、或は學者によりこれを否定せんとするものあり。されば予は先づ郷土教育に従事する者のため該線の意義、由來、特徴乃至は諸否定説等の梗概を極て通俗に説き、併て予の意見を述べ該線認識上の一資料に供せんとす。

ブラキストン線の意義及び由來

ブラキストン線とは動物地理學上鳥獸類を基準として、細比利亞區と滿洲區とを分割せんとして津輕海峽に設けたる動物分布線の謂にして、ブラキストン氏の創意に基きたるを以てこの名あり。事實北海道、樺太産動物には細比利亞系のもの多く、本州産動物の多數は朝鮮産のそのものに類似す。蓋し現棲本州産哺乳類にして朝鮮より移動せし時には既に津輕海峽存在して以北の進入を許さざりしため、現今の状態を示せしものと推考せらる、今ブラキストン線の由來に關する概畧を述べんとす。

千八百五十七年英人スクレター氏は鳥禽類の分布を研究し、地球上の動物分布區域を東洋區、新北區、舊北區、濠洲區、新熱帶區、エチオピヤ區に大別せし以來、諸學者により各區は更に細分せられ詳細に研究せらるゝに至れり。

我郷土のブラキストン線

我國の大部分は舊北區に屬し琉球の小部分は東洋區に所屬す。舊北區は亞細亞大陸に於て、更に細比利亞區と滿洲區（青森縣之に屬す）に分たれ、この境界線は北緯五十度の黑龍江南方に於て海に入ること判明せしも、日本に於ては何處を通過するものなるやは久しく不明なりしが、千八百八十年英人ブラキストン及びブライヤー兩氏(1)は日本の鳥類と題する論文に於て、津輕海峽がこの明瞭なる分布上の境界線たることを提唱し、千八百八十二年兩氏(2)は他の論文に於ても同意見を述べたり。千八百八十三年ブラキストン氏(3)は前論文の擴張を試まむとして、更に樺太蝦夷半島説を提唱せし大論文を亞細亞學術協會(Asiatic Society of Japan)の例會に於て發表し、哺乳類、鳥類の分布上より日本内地は南北地域の混合地帯なれども、北海道は樺太と共に細比利亞の東部を形成す、本州との動物相上の差異を指摘し北海道には五十餘種の本州に見ざる鳥類を産すとせり。

又内地の混合相なる理由として氷河時代に於ける津輕海峽の氷結に依る北方動物の南進を説述し、最後に津輕海峽は早くより存在し北海峽南北の動物相を分離し、海峽の氷結により兩岸動物の混棲を招致せるものと結論せり。茲に於て上記論文の發表せられたる同例會の論議に於て英人ミルン氏は、新しき動物學上の分布境界線を成す津輕海峽は

バリ、ロンボック兩島間に存する境界線を Wallace's Line と呼ぶが如く、これを Baldwin's Line と稱呼すべきを提唱し、本境界線の起原を説くに氷河時代の存在せしこと必要なれども、かゝる時代の存在せし事實は幾多の證據ありとし、日本動植物相の特有なる分布を示し、ブラキストン氏が日本に於ける氷河時代の存在を説きたるを合理的且自然的なりと論ぜり。

而して同氏(4)は千八百八十六年に該問題に就て論述せるを以て、ブラキストン線の命名者はミルン氏創見者はブラキストン氏にして、時恰も明治十六年(一八八三)の事なりとす。

附記 ブラキストン、ミルン兩氏の略傳

(1)ブラキストン (Balkston Thomas Wright 1832—91)

英國軍人(砲兵大尉)探險家、動物採集家、一八五七—一八八〇年英清戦役に參加して揚子江上流を測量し、併せて苗族 (Miao—Tse) の研究を試みたり。文久元年(一八六一) 函館に來たり對露、對支の貿易業に従事し、又製材製水業を起し氣象觀測にも當り本邦最初の測候所を設けたり渡函の翌年よりプライヤー氏と共に我國鳥類採集に従事し有益なる論文(1)(2)(3)を發表せり。一八八四年(明治十七年) 函館を去り本國に歸り次で米國に渡り、カリフォル

ニヤのサンデイエゴに於て歿す。氏の採集せし標本は今尙札幌博物館に保藏せられ一千種以上に達す(同氏の古宅寫眞は理學界第八卷第十二號口繪にあり)。

(2)ミルン (Milne, John 1830—1913) 英國地震學者、一八七六年(明治九年) 日本工學寮(工部大學校)に招聘せられ金石、地質、鑛山學を講じ、次で帝國大學工科に於て前職を繼ぎ、傍ら北海道に於ける貝塚の發掘、古代文學の研究等に従事せり、宗谷海峽、津輕海峽等の成因に關する論文を發表す(一八八一年)一八九四年(明治二十七年)滿期歸國し、夫人堀川利根子は夫死後歸國し、函館に於て歿す(上記兩氏は我郷土に足跡を印したるを以て茲に附記せし次第なり)

ブラキストン線に關する諸學者の説

ブラキストン線(津輕海峽線)の證認以來、諸種の動物分布の研究進歩せし結果、宗谷海峽線を重要視する者多きを加ふるに至れり。今これに關する創意者の論據を表示せば次の如し。



(者見發線ントスキラブ) 氏ントスキラブ

津輕海峽線を重要視する者			宗谷海峽線を重要視する者			兩海峽線を重要視する者		
氏名	論據動物	論文番號	氏名	論據動物	論文番號	氏名	論據動物	論文番號
ブラキストン	鳥類、哺乳類	(1)(2)(3)	八田三郎	兩棲、爬虫類	(16)(17)(18)(19)	松本彦七郎	古代獸類	(31)
プライヤー	鳥類	(1)(2)	橋本潤一郎	同上	(20)	山階芳麿	鳥類	(32)
ミルン	鳥類 其他	(4)	江崎悌三	昆虫類	(21)(22)(23)			
シーボーム	鳥類	(5)	犬飼哲男	兩棲類	(24)(25)(26)			
スクレター	哺乳類	(6)	玉貫光一	昆虫類	(27)			
平山常太郎	哺乳類其他	(7)	牧茂一郎	蛇類	(28)			
青木文一郎	哺乳類	(8)	佐々木望	兩棲類	(29)			
黒田長禮	鳥類	(9)(10)	ジヨルダン	魚類	(30)			
岸田久吉	哺乳類	(11)						
岡田彌一郎	蛇蛙類	(12)(13)(14)						
野澤俊次郎	鳥獸蛇蛙	(15)						

上表の如くブラキストン線に對し諸説あることは學界進歩の結果なれども、今ブラキストン線に對する否定説を概

括する時は、北海道は本州と共通する動物を産すること多きも、樺太には北海道と共通するもの少く細比利亞系の動

物を多産するが故に、宗谷海峡は北方型動物の南限、南方型動物の北限地帯なりとす津軽海峡を無意義のものとするにあり。この主唱者は八田博士にして宗谷海峡線を八田線と稱呼するに至れり。八田、橋本兩氏は千九百十年北海道産爬虫類及び兩棲類の分布を調査し、津軽海峡は細比利亚及び満州區の境界線をなさずと主唱し、次で八田氏は北海道産哺乳類、鳥類、爬虫類、兩棲類等を調査したる結果より、宗谷海峡に確然たるこの境界線存在することを主張せり。又同氏は千九百廿一年本州、北海道、樺太産哺乳類、爬虫類、兩棲類の分布相より、ブラキストン氏の樺太及び北海道に關する古地理學上の意見は、動物分布上に著しき徴候を與へずと論じ、千九百廿三年には特に爬虫類、兩棲類の立場より、北海道産アマガヘル及び蛇の六種は遠く亞熱帯より北進し宗谷海峡にて喰止められ居るが故に、同海峡は最も重要なりと重ねて論述せり。この結果この説に同意する諸學者續出し今日に及びしものなり。

又兩海峡を重要視する者において古代哺乳類の分布及び現代鳥類分布の點より、樺太を北海道區より分離し八田線を滿洲區の北限としブラキストン線を細比利亚區の南限とし、兩者は決して優劣の差なく同等に有力なるものなることを主張するにあり。かくの如くブラキストン線に對し諸説あり何れも確實なる論據を有す。

ブラキストン線に對する予の意見

予は津軽海峡線を重要視する一人にして、大正十一年以來岡田禰一郎博士と共に青森縣産動物の調査に従事し、哺乳類、鳥類、爬虫類、兩棲類、魚類、介類等の分布を研究せしに、次表の如く北海道以北との相違點からざること知れり。

標準和名(種名)	北海道				備考
	樺太	本州	北中	南四	
哺乳類					
エチゴウサギ			×	×	冬白くなる兎
エゾノウサギ	×				
ノウサギ		×	×	×	三戸郡市川村に多く冬白變せず
アヅマモグラ		×	×		白化せるもの予所藏
イタチ	×	×	×	×	北海道に明治以後移入せしものなり
ラコジョ(ヤマイタチ)	×	×	×		冬尾端の外全身白變す

ブラキストン線南北の動物分布一覽表(×:産 △:稀)

我郷土のブラキストン線

エゾイタチ	×	×																		同	上
イヒツナイタチ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	方言エゾナカセギヒトサツ	クツキネコ(冬全身白變)
カハウソ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	方言カネコ	(河猫ノ義)
カモシカ																				方言アラシ又アラ	
サル																				下北郡佐井は世界	最北限分布地帯
キツネ																					
アナグマ																				方言マミ	
クマ																					
ヒグマ																					
アカグマ																					
ヤマイヌ																				方言オエノオホガ	メ(現今絶滅せり)
オホカミ																					
オホヤマネコ																					
タヌキ(ムジナ)																					
エゾタヌキ																					

ユキヘウ	×																				
テ																					
クロテン																					
リ																					
エゾリス																					
シマリリス																					
カラフトリス																					
ヤマ																					
ムサ、ビ																					
ホンシウモモ																					
ンガ																					
エゾモモンガ																					
カラフトモモンガ																					
ジャコウジカ																					
トナカイ																					
ハツカウサギ																					

北海道大雪山に産す

方言キノコダマ(下北郡佐井の山にて時々採集あり)
バンドリと云ふもの
方言ユブシマ(十和田山に多し)

ヤマドリ	キジ	ミユビゲラ	アラゲラ	ヤマゲラ	クマガラ	オホアカゲラ	コアカゲラ	鳥類	トウホクヤチ	カハネズミ	アブラカウモリ	ヤマカウモリ	オホヒゲカウモリ	ホンシウヤマモグラ
		×			×		×						×	
				×	×		×					×		
×	×		×			×			×	×	×	×		×
×	×		×			×			×	×	×	×		×
×	×		×							×	×	×		×
										×	×	×		
				×	×					×	×	×		
	方言サトキジ(里 雄子)		方言ケラツ、キ			方言ケラツ、キ			八甲田山にて採 集せり	方言カネズミ				

ヤマセミ	クワクコウ	ホト、ギス	ミヤマカケス	カケス	フクロウ	シマフクロウ	ブツボウサウ	シマエナガ	エナガ	チゴモズ	オホモズ	モズ	カラフトライテウ	エゾライテウ
	×						×	×			×	×	×	×
	×		×			×		×			×	×	×	×
×	×	×		×	×		×	×	×	×		×		
×	×	×		×	×		×	×	×	×	×	×		
×	×	×		×	×		×	×	×	×	×	×		
×	×	×		×			×					×		
		方言メツケトリ			方言モホ				方言エビシヤク			方言モズタカ		

ウミネコ	ツバメ	トビ	ワタリガラス	エゾハシブトガラス	ホシガラス	ハシボソガラス	ハシブトガラス	ミソサバイ	カラフトミソサバイ	ノビタキ	コマドリ	メジロ	ウグヒス	アカセウビシ
×	×		×	×	×				×	×				×
×	×	×	×	×	×	×	×	×		×	×	×	×	×
×	×	×			×	×	×	×		×	×	×	×	×
×	×	×			×	×	×	×		×	×	×	×	×
×	×	×				×	×	×		×	×	×	×	×
×	×	×				×	×			×	×	×	×	×
×	×	×				×	×			×	×			×
の八戸市蕪島は有名 蕃殖地 方言ゴメ														
八甲田山に多し														
方言フルガラス(市街・部落・海岸等に普通なる)														
方言ナンバンテウ														
東郡三厩村は有名の蕃殖地														
下北半島にて蕃殖す														

ヤマカガシ	ヒバカリ	爬虫類	カラフトワシ	ヒメハジロ	コアジサシ	ヤツガシラ	ノガン	ベニバラウソ	ナキイスカ	クマダカ	オホワシ	ウトウ	ウミウ	オホハクテウ
			×			×	×				×	×	×	×
×	×			△	△	△	△	×	×	×	×	×	×	×
×	×			△	△	△	△	△	△	×	×	×	×	×
×	×			×	×	×	×			×	×	×	×	△
×	×			×	×	×	×			×	×	×	×	△
×	×		×		×	×	×	△		×	×	×	×	△
方言ヤマカガシ														
方言ヒミズ														
青森灣に出現す														
稀なり														
本縣には極めて														
を臧す														
迷鳥にて予標本														
三本木農學校に														
標本あり														
同 上														
迷鳥にして予標本を臧す														
方言ツナギ														
東郡小湊町海濱は有名の群集地														
南郡猿賀神社は有名の蕃殖地														

シマヘビ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	方言サナダヘビ
ヂムグリ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	方言アブラヘビ
アラダイシヤウ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	方言アヲノロシ
シロマダラ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	方言シラナビタ
カラスヘビ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	方言クツヘビ
マムシ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	シベリヤ及北支那に産す
カラフトクサリ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	八甲田山に多し(三湖 にも採集)方言イムシ
セグロウミヘビ	△	×	×	×	×	×	×	×	×	
トカゲ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
カナヘビ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
カラフトトカゲ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
兩棲類										
ハコネサンセウウヲ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	八甲田山に多し
日光サンセウウヲ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	同上
東北カスミサシセウウヲ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	方言上記三種共サンシヨカヅカ

オホサンセウウヲ	△	△	△	△	△	△	△	△	△	大正二年東郡高田村産の標本を蔵す
エゾサンセウウヲ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
カラフトサンセウウヲ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
アカハラキモリ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	方言カラボ、アカハラ
ヒキガヘル	×	×	×	×	×	×	×	×	×	方言モツケ、ガマモツケ
エゾヒキガヘル	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
トノサマガヘル	×	×	×	×	×	×	×	×	×	方言シマビツキ
カジカガヘル	×	×	×	×	×	×	×	×	×	方言カハズ
ツチガヘル	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
エゾアカガヘル	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
ヤマアカガヘル	?	×	×	×	×	×	×	×	×	
ニホンアマガヘル	△	×	×	×	×	×	×	×	×	樺太にて採集せりと云ふ
カラフトヒキガヘル	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
アマールアカガヘル	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
ガヘル	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
シュレーゲルアラガヘル	×	×	×	×	×	×	×	×	×	方言アヲモツケ、アヲビツキ

プトガラス、コアヂサシ、爬虫類のヒバカリ、ヤマカガシ
シロマダラ、カラスヘビ、トカゲ、カナヘビ、兩棲類のハ
コネサンセウウヲ、日光サンセウウヲ、東北カスミサンセ
ウウヲ、アカハラキモリ、ヒキガヘル、トノサマガヘル、
ツチガヘル、シユレーゲルアラガヘル、モリアラガヘル、
魚類のドヂヤウ、ナマズ、メダカ、アミモンガラ、昆虫類の
ウモノヲバチ、クロアゲハ、キテフ、チツチゼミ、ヒグラ
シ、クハカミキリ、カブトムシ、カナブン、ゲンジボタル
セウゼウトンボ、シホガラトンボ、エンマコホロギ、ナナ
フシ、オカメコホロギ、軟體動物のタコブネ、ハマグリ、
ヤマトシバミ、アカガヒ、オキシバミ、マデガヒ、モンズリ
ガヒ、ウチムラサキ、カガミカヒ及びウニ類のイガクリガ
ヒ等なれども、詳細に比較する時は尙多數の分布差を示す
に至るべし。

而して津輕海峽以北産のものは本篇に於ては大部省畧し
たりと雖も、哺乳類のエゾノウサギ、エゾイタチ、ヒゲマ、
アカゲマ、オホカミ、オホヤマネコ、エゾタヌキ、ユキヘ
ウ、クロテン、エゾリス、シマリス、カラフトリス、エゾ
モモンガ、ジヤコウジカ、トナカイ、ハツカウサギ(廿日
兎)鳥類のコアカゲラ、クマガラ、ヤマゲラ、ミユビゲラ
エゾライテウ、カラフトライテウ、シマフクロウ、ミヤマ
カケス、エゾハシプトガラス、ワタリガラス、カラフトワ

シ、爬虫類のカラフトクサリ、カラフトトカゲ(コモチト
カゲ)兩棲類のエゾサンセウウヲ、カラフトサンセウウヲ
エゾヒキガヘル、カラフトヒキガヘル、アムールガヘル、
魚類のフクドヂヤウ等にして亞細亞大陸系のもの多く、樺
太、北海道、本州と共通なるものはカハウ、モズ、クワク
コウ、アカセウビン、ツバメ、ウミネコ、オホハクテウ、
ウミウ、ニホンアマガヘル(昭和六年八月十二日樺太眞岡
郡羽母舞平原濕地にて、山田五郎、小笠原馨兩氏により二
匹を採集、昭和六年小笠原馨郷土教育上より眺めたる動植
物眞岡第一小學校)等なり。是等青森縣を基準とせる分布
狀況より考察するも、津輕海峽の南北により動物相に尠か
らざる相異なることを推知し得べく、更にこれを本土中南
部に延長して比較する時は一層確然たる相異を認むべし。
茲に於て予は鳥類及び他の動物分布相より、津輕海峽は
日本動物分布上重要視すべき處なると、黒田、岡田、岸田
ブラキストン諸氏に同意し、ブラキストン線は八田博士一
派の主張する無意義なるものにあらざることを主張す。同
時に宗谷海峽線(八田線)も樺太、細比列大陸との分布
關係深きを以て、亦重要視すべきものなるを以て別に研究
するを至當と信ず。

青森縣に於ける動植物分布狀況の特徴

我郷土にはブラキストン線存在するが故に、動植物の分布狀態自ら北海道と異なる點尠からず、動物相に於ては南方系の北限地帯を示すもの多く、北緯四十一度三十分の下北郡佐井村は最も注目せらる、蓋し南方より環境的北遷移住を行ひたるも、津輕海峽（略々東西の方向に互り長さ約百十籽、その幅龍飛岬と白神崎間及び大間崎と汐首崎間に於て最狭にして各二十籽なれども、中間は幅廣く約五十五籽に達す。深度は海峽の東部に於て最深五百米に達すれども中央及び西部は二百五十乃至三百米を最深部とす）存在のためその附近に集合して現今に及びしものなり。

世界最北限分布を示す有名なるものはサル、カモシカ、ヤマネ、モリアアガヘル、ハコネサンセウウヲ、アカハラキモリ等にして何れも下北半島を以て終點を告ぐ、而して仔細に調査する時は該半島中佐井村宇原田を流るゝ原田川は最も注意すべき所にして、同流以北には脊椎動物の存在すること少く、ハコネサンセウウヲの如きは確然たる北限を示せり、鳥類にありては三百種以上を該半島にて認め得べく、渡鳥は春秋二季に必ず尻屋及び大間岬の燈臺を目標として移行す、又同地帯に於て蕃殖する種類亦多く他地方に例を見ず。

一方垂直的分布を観るも本縣中央部に蟄居する八甲田山には、千五百五十米の高處迄兩棲類、爬虫類を産す⁽³⁵⁾、又日本海岸と太平洋岸とは分布相に差異を生じ、前者には北海道と共通せるザリガニ、サバエを産するも後者には之を認め難く、西海岸にはトノサマガヘルの本州中南部型の綠色を呈するものを産す、三戸郡地方には冬白變せざるノウキギ及びカモメ類多く、鮫沿岸の無人島にはウミネコの蕃殖地あり。又キテフ、ナ、フシ、タマムシの如き昆虫類を産す、陸奥灣内にては珍奇のエビ類、ホタテ等多く、各方面により各異なる動物分布相を示せり。

青森縣産動物目錄に就ては他日便宜の誌上にて發表すべくも脊椎動物に就ては既に發表⁽³³⁾⁽³⁴⁾⁽³⁵⁾せるものあり。

青森縣の植物相に就ても津輕海峽の南北により異なることを知るべし、北海道に産し青森縣に産せざるものの數例をあけんに、アヲトバマツ、アカトバマツ、エゾイチゴエゾヤマハギ、ナガバオドキリ、ホソバトウキ、ホロムイリンダウ、ネムロンシホガマ、オホイハアザミ、フオーリアザミ等にして、青森縣に産し北海道に産せざるもの亦多數あり。その主なるものはヨモギ、フジバカマ、ニハトコ、アカネ、サギゴケ、ネナンカツラ、リンダウ、センブリ、ヒナザクラ（八甲田山北限）、ミチノクコザクラ（岩木山限産）、チドメグサ、オホバキスミレ、ヤマツバキ（夏泊

半島椿山)、クララ、ヘビイチゴ、ヤシヤビシヤク(方言ラツシヨ)、イカリサウ、トリカブト(方言ブシ)、ヲキナグサ(方言オバガシラ)、ミヅ、ミヤマヤナギ、ドクダミ(方言イヌノヘ)、ホテイラン(恐山北限)、カキツバタ、アヤメ(方言ソドメ)、シヤウジヤウバカマ(恐山北限)、アラモリトバマツ(八甲田山北限)、スギ(西津輕郡赤石北限)、ミヤマネズ(八甲田山北限)、ヒメコマツ(全上)、クロベ(岩木山北限)、コメツガ(同上)、イヌガヤ(尻屋北限)、ハツカウダゴヤウ(八甲田限産)、ピラウドシダ(西津輕郡十二湖畔北限)等なれども、本縣特産と稱せらるゝものは岩木山のミチノクコザクラ(イハキコザクラ)にして他に見ること能はず。他は本縣として珍稀とせらるゝものにして、八甲田五葉、ツガルフヂ(中津輕郡目屋地方深山及び秋田縣境)、コハマナス(西海岸尻屋より岩手縣に至る太平洋岸)、シロバナカタクリ(岩木山)、シロバナハクサンチドリ(同上)、ホソバツガザクラ(同上)、シロバナアヲノツガザクラ(同上)、シロボシオニノヤガラ(八甲田山)、ミチノクスミレ(南津輕郡黒森山)、ナンブサウ(同上)、チシマフウロ(南津輕郡虹貝山、楯ヶ峯)、キバナコマノツメ(楯ヶ峯)、ムラサキツボスミレ(同上)等これなり。

北海道、千島、樺太にはトリカブトの種類多くエゾホソ

我郷土のブラキストン線

バトリカブト、エゾトリカブト、ホザキブシ、テリハブシ、ウスバトリカブト等は北海道産にして、アイヌの毒矢に用ひたる毒分は是等植物より得たるものなりと云ふ。

本縣の沿岸植物群落はやゝ特色あり、西海岸には秋田縣界より龍飛岬に至る迄コハマナス、エゾノコギリサウの群落發達し、鱒ヶ澤より以南にはハマゴウの群落を混じ奇觀を呈す。太平洋岸に於てもコハマナス、エゾノコギリサウの群落發達して岩手縣に達せり。高山植物の分布に於ては緯度、氣候等の關係上、彼の信甲地方高山にては二千五百米以上の高所に達せざれば自生し得ざる植物にても、八甲田山にては九百米附近よりガンカウラン、アラモリトバマツ、ハビマツ等自生し、又尻屋岬にありては平地なるに拘らず、緯度高きと強き海風を受くる關係上ガンカウラン、コメバツガザクラ、イブキヂヤカウサウ、シロシヤクナギイハナシ等の自生を見る。

尙下北半島の植物相中意を惹きしは、恐山にホテイラン猿ヶ森(東通村)には野生のオモト(小井川潤次郎氏採集)田名部驛附近一帶の沿岸泥炭地帯に楊梅科のヤチャナギ、釜伏山にはチャウヂサウ、クマガイサウ(多)等を産することなりとす。尙本縣植物相研究上考慮せざるべからざる一項は歸化植物(Naturalized plants 雜草中元外國より傳來し現時雜草化せるもの)に對する認識觀念の養成にして

本縣には約四十種以上を採集し得べく、以て北海道と共に古來海運業の盛なりしことを推知し得べし。元來歸化植物は交通機關を利用し貨物中に種子を混じて傳布するものなるを以て、本縣産のものには北海道を経て傳はれるものと長崎、神戸、横濱等を経出して傳來せるものとの二類あり新設の停車場には發見し得ざるも數年にして傳布することには五能線各驛に就て觀察し得べし。尙本縣には鑛山多きを以てこれと關係を有する鑛山植物(特に鑛床近き露頭に生育する植物)も特異の相を成すを以てこの研究も亦重要なりとす。

摘 要

- (一) ブラキストン線(津輕海峽線)は北海道以北産動物と青森縣以南産動物分布の差異を示すための假想線にして該線の南北により動物(植物も)の分布相著しく異なれり。
- (二) ブラキストン線は明治十六年ブラキストン氏の發見せるものにして、同年ミルン氏によりこの名稱を附せられたるものなり。
- (三) ブラキストン線に對し否定説を試む者あるも、動物分布の相互關係上極めて確然たるものにして、予も大に認むる所あり、該線の存立を永久に確證す。

參 照 文 獻

- (1) Blakiston, T. and Pryer, H. 1880 Catalogue of the Birds of Japan Transaction of the Asiatic Society of Japan, Vol. 8, PP. 172—241
- (2) Blakiston, T. and Pryer, H. 1882 Birds of Japan Trans. Asia. Soc. Japan, Vol. 10, PP. 84—186
- (3) Blakiston, T. 1883 Zoological Indications of Ancient Connection of the Japan Islands with the Continent Trans. Asia. Soc. Japan, Vol. 11, PP. 126—140
- (4) Milne, J. 1886 The Geology of Japan.
- (5) Seefohn, H. 1890 The Birds of the Japanese Empire.
- (6) Schaler, W. L. 1899 The Geography of Mannalsee.
- (7) 平山常太郎 1910 動物分上に於ける津輕海峽 理學界第七卷六百九十四——六百九十六頁(フナキマツトツ氏の記事もある)
- (8) 青木文一郎 1913 本邦に於ける哺乳動物の分布狀況 動物學雜誌第廿五卷四百九十八——五百七十九頁
- (9) 黒田長禮 1925 日本鳥類分布に就て 地學雜誌 第廿七卷第四百二十七號——七十二頁

- (10)同 上 1927 日本鳥類の分布に就て 明治聖徳記念
學會紀要第二十八 五十九——七十一頁
- (11)岸 田 文 吉 1925 動的及立體的に觀た 日本産陸棲動物
の分布論(下) 東洋學藝雜誌 第四十一卷
第二號四十一——五十四頁
- (12)岡田彌一郎 1926 A Steady on the Distribution of Ter-
restrial Batrachians of Japan Annot. Zool. J-
apon, Vol. 11, Pp. 137—143
- (13)同 上 1931 日本産蛙總説
- (14)同 上 1931 日本に於ける動物分布に關する考察
動物學雜誌第四十三卷第五百八,九,十號 三
百廿——三百五十一頁
- (15)野澤俊次郎 1892 北海道と南日本との動物の差異 動物
學雜誌第四卷第五十號 四百六十五——四
百七十二頁
- (16)八 田 三 郎 1910 動物分布上の北海道の位置 動物學雜
誌第廿二卷 八十五——八十九頁
- (17)同 上 1921 フラキエトソ線は地學上果して其の
意味をなすか 地學雜誌第卅三卷六百四十
九——六百六十一頁
- (18)同 上 1910 北海道に於ける兩棲類及び爬虫類動
物雜誌第廿二卷第二百六十六號 五百五十
八——五百六十三頁
- (19)同 上 1923 極北日本の動物界理學果第廿一卷 九
百十一——九百十五頁
- (20)橋本潤一郎 1910 日本の最北端に産する Hynobius 屬のサ
ンセウウラに就て 動物學雜誌 第廿二卷第
二百六十五號四百九十七——四百九十九頁
の境界線に就て 動物學雜誌 第卅三卷四百
四十四——四百六十六頁
- (21)江 崎 悌 三 1921 日本に於ける昆虫の地理的分布と其
の境界線に就て 動物學雜誌 第卅三卷四百
四十四——四百六十六頁
- (22)同 上 1922 (a) 南樺太の蝶類 動物學雜誌 第卅四
卷 八百九十八——九百十三頁
- (23)同 上 1922 (b) 南樺太の昆虫に就て 動物學雜誌
第卅四卷 九百卅四——九百卅八頁
- (24)犬 飼 哲 男 1925 樺太産山椒魚に就て 動物學雜誌第卅
七卷 四百九十七——五百五頁
- (25)同 上 1927 On Urodelaan Fauna of Sakhalin
Annot. Zool. Japan, Vol. 11, Pp. 255—256
- (26)同 上 1930 Notes on Breeding Habits of Takydri-
onans tachydromoides Schlegel. Jour. Fac.
Sci. Hokkaido Imp. Univ., ser. 6, Vol. 1,
Pp. 33—40
- (27)玉 貫 光 一 1929 北樺太胡蝶知見昆虫 第三卷十三——

冊二頁

- (28) 牧 茂一郎 1931 Monograph of the Snakes in Japan.
- (29) 佐々木 望 1924 On a Japanese Salamander, in Lake Kutarnush, which propagates like the Axol-old Jour. Coll. Agr. Hokkaido Imp. Univ., Vol. 15, PP. 1—36
- (30) Jordan, D.S. 1901 The fish fauna of Japan, with Observations on the Geographical Distribution of Fishes Science, 2nd. Ser. Vol. 14, PP. 545—567
- (31) 松本 彦七 1918 津輕海峡の意義 動物學雜誌第卅卷第 三百六十一號四百六十六—四百六十八頁
- (32) 山崎 芳麿 1929 フラキストン線以北に於ける鳥類の 分布 日本生物地理學會會報 第一卷第二號 五十七—六十六頁
- (33) 和田 千藏 1922 青森縣產鳥類目錄 鳥 第十二, 十三號 百廿一—百卅三頁
- (34) 同 上 1925 陸奥の渡り鳥 青森縣業書第四・五
- (35) 同 上 1931 八甲田山に於ける青蛙の研究 齋藤報 恩會學術研究報告第十
- (36) 村田庄次郎 1913 樺太動物調査報告 樺太廳
- (37) 日本鳥學會 1932 改訂 日本鳥類目錄